

2015 年度後期 授業評価アンケート結果に対するコメント

—法学部—

法学部長 鋤本 豊博

授業評価アンケートは、学生の視点から授業改善の手掛かりを探るものであるが、問題は、その結果をどう読み、いかに分析して課題を発見し、具体的な授業改善に繋げていくかである。

昨年度後期の集計結果から注目されるのは、「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」という項目の平均値が前期に比べ 3.59 から 3.74 に増え、「予習または復習をよくした」という項目の平均値も 3.24 から 3.47 に増加する一方、「総合的にこの授業を評価できる」という項目の平均値が 4.37 から 4.34 に減少するに止まったということである。学習の負担が増えるとその授業に対する満足度が減少するのが通例であるから、例えば、学生の理解度を確認しながら授業を進めたり、学生の興味を湧くような話題を提供したりするなど、教員の工夫がなされたものと推察される。

教員のできることは限られている。いつも学生に関心を向け、そのニーズを探り当て、できる限り授業に反映させようとする姿勢を貫くことに尽きるのである。